

#### 4. 江戸時代の遺構

##### 布基礎建物

戦国時代の堀の上で、江戸時代の建物の基礎(地業)が検出されました。幅約0.6mの溝を掘って川原石を詰め込んだ布基礎と呼ばれる構造で、深さ0.2~0.3mほどを残して上部は大きく削平されています。

京都・淀城などの類例から、長さ約8.5m×幅約4.0mの土蔵跡とみられます。中心部に方形の石敷が認められ、半地下式の貯蔵庫などが設けられていた可能性があります。

二の丸御殿などの礎石建物は痕跡すら失われている中、初めて確認できた二の丸の建物です。



江戸時代の布基礎建物跡 (左)基礎部分の検出状況・北側から (右)石材取り上げ後・南側から

#### 5. 出土遺物

今回の調査では、とくに戦国時代の堀から、多くの遺物が出土しました。大屋根を飾った重厚な瓦をはじめ、土師皿や備前焼播鉢、瀬戸・美濃焼の碗などが出土しています。このほか中国製の青磁や白磁、染付などの輸入陶磁器も発見されています。

また、堀跡が湿潤・低酸素の環境にあったため、漆塗り椀などの木製品が良好な状態で多数残っていました。このうち、荷物に括りつける荷札木簡には、墨書がみとめられました。表面は舟運時の公事(税)に関すること、裏面は人名とみられます。

今後、調査・整理を進めることで、当時の生活用具の実態や、流通や生産に関わる情報が得られると期待されます。



(裏) (表)

荷札木簡 長さ約一四九cm、幅約二・二cm  
 (読み下し)  
 表「舟公事之其外 五石之内  
 兵庫升 九升五合」  
 裏「梅坊まいる わかさ」

#### 6. まとめ

今回の調査では、中世高槻城に遡る遺構を多く検出しました。とくに和田惟政の城主時代以前に機能していた堀が、高山右近の城郭整備の際に埋め立てられたことが判明し、絵図や文献に乏しい中世高槻城の構造や、その移り変わりに迫る貴重な手がかりとなります。

西暦(元号)	ことがら	今回検出した遺構の時期
1527(大永 七)	高槻入江城が文献に登場する	堀
1568(永禄十一)	足利義昭と織田信長が上洛。入江氏が従う	
1569(永禄十二)	入江氏が信長に謀殺される。和田惟政、高槻城主となる	
1571(元亀 二)	和田惟政戦死、息子・惟長城主	
1573(天正 元)	高山氏が高槻城主となる	
1585(天正十三)	右近、明石へ転封、豊臣秀吉が高槻を直轄	石積み護岸を伴う遺構
1595(文禄 四)	新庄直頼、城主	
1600(慶長 五)	関ヶ原の戦い	布基礎建物
1601(慶長 六)	徳川家康が高槻を直轄	
1615(元和 元)	大坂夏の陣で豊臣氏滅亡、陣後に内藤信正城主	
1617(元和 三)	土岐定義城主、公儀修築	
1618(元和 四)	城下の検地	

室町時代～江戸時代初期の高槻城関係略年表

## 高槻城二の丸跡南西部の調査 現地説明会資料

○調査主体	高槻市教育委員会	○現地説明会	平成30年6月2日
○調査期間	平成29年9月19日～(調査継続中)	○調査面積	約1,100㎡
○調査目的	新文化施設建設に先立つ発掘調査		

#### 1. 高槻城跡

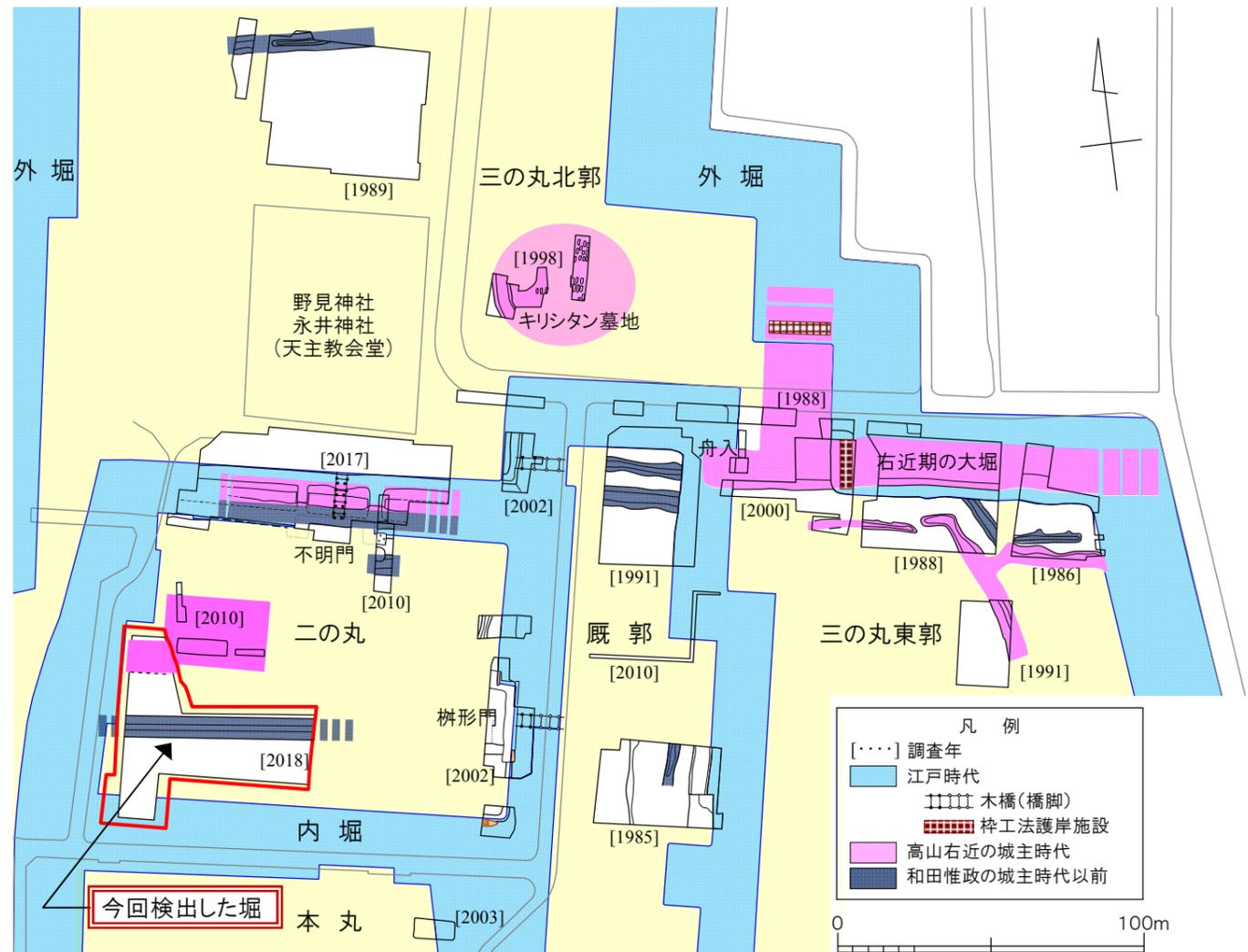
高槻城は天神山丘陵南側の沖積地に位置する平城で、北に西国街道、南に淀川を擁する水陸交通の要衝に位置します。戦国時代の高槻城は、織田信長上洛後、和田惟政やキリシタン大名の高山右近などが城主をつとめた、堀と土塁で囲まれた堅固な城でした。江戸時代の元和三年(1617)に徳川幕府が修築した近世高槻城は、石垣と土居をめぐらせ、天守がそびえる本丸、城主御殿が建つ二の丸、家臣団が住まう三の丸、帯郭、弁才天郭、蔵屋敷などを備えた本格的な近世城郭です。複数の城絵図と現在の地割から、のちに増築された出丸を含む全体の規模は東西630m×南北580mと推定されています。

高槻城は明治七年(1874)の鉄道建設に伴って破却され、その後も堀跡の耕地化や工兵隊駐屯などに伴う大規模な改変があり、城跡は大きく変貌しました。

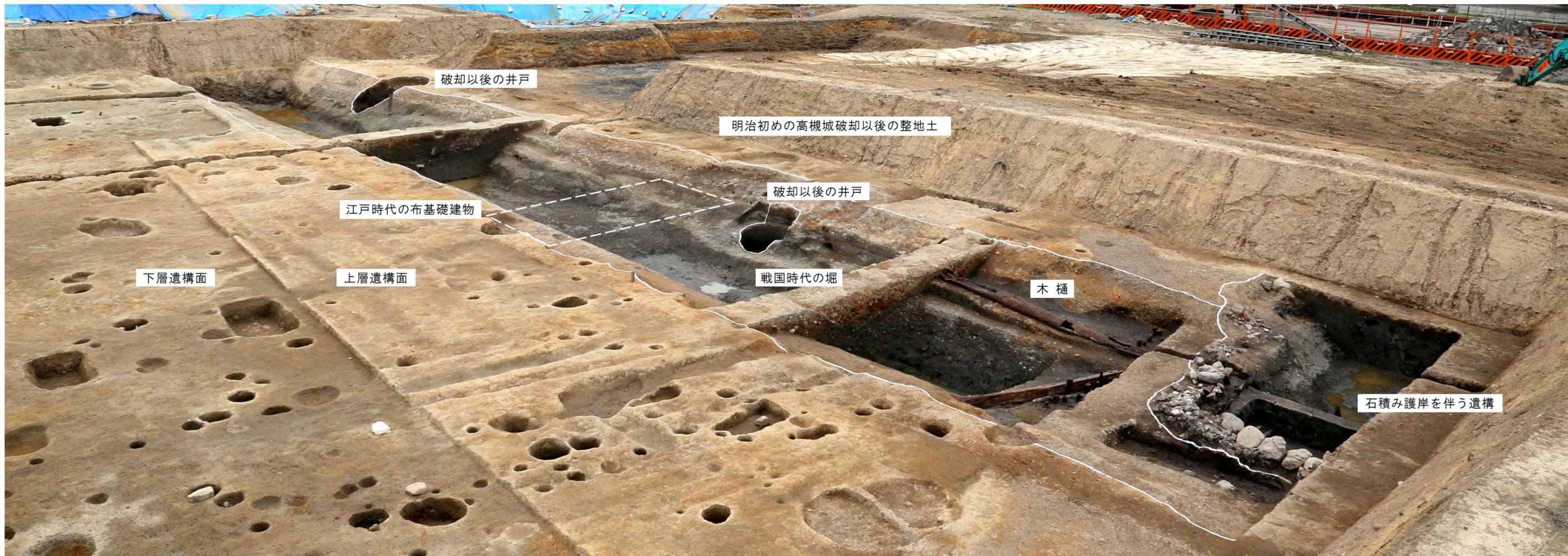
#### 2. 新文化施設建設に先立つ発掘調査

今回、高槻城二の丸跡に計画された新文化施設の建設に先立って、発掘調査を実施中です。

これまでの調査の結果、戦国時代の高槻城の堀を約60mにわたり検出しました。また、この堀の埋め戻し後の一定期間に機能していたとみられる石積み護岸を伴う遺構や、江戸時代の二の丸にあった建物を初めて確認しました。



高槻城二の丸・三の丸周辺の発掘調査状況 太線：今回の調査地



### 3. 戦国時代の遺構

#### 堀

幅約7m×深さ約2.5mの断面逆台形に掘られた大溝を、これまでに延長60mにわたって検出しました。やや北に振れながらほぼ東西方向に走り、戦国時代一当時の高槻城主は入江氏一の堀と考えられます。

断面観察から、少なくとも1度機能回復を図ったものか掘り直しが行われ、その後ブロック状の粘土で埋め立てられていることがわかりました。埋め立て土の直下から出土する遺物の時期は16世紀中頃～後半に集中し、堀が機能・廃絶した年代を示唆しています。

埋め立てに使われたブロック状粘土は深い地層から掘り出されたもので、築城などの大工事の副産物です。和田惟政の城主時代は短く、その後に城主となった高山右近は、城地の拡大や広大な堀を伴う城の大改修を行いました。和田惟政の時代に機能していたこの堀が、右近の時代に埋め立てられた可能性が考えられます。



東側からみた戦国時代の堀の堆積状況

南東側から見た調査地全景 戦国時代・江戸時代の遺構は明治時代以降の改変により失われ、堀や井戸、建物基礎などの深い遺構が辛うじて検出された。上層・下層遺構面とも、基本は戦国時代以前の集落遺構である

#### 石積み護岸を伴う遺構

堀の東端部で、埋め立てと並行して構築された石積み護岸を伴う遺構を検出しました。護岸は現状で東西約3m×南北約7mを測り、堀を埋め立てた南側は粘土塊で盛土を施して杭を打ち、不等沈下防止の胴木を据えた上に石積みをする事で、堅固な護岸をつくらうとした工夫がみられます。地山を掘削した北側にはそうした施設はみられません。胴木は、建築材を転用したもので、堀の埋め立てを伴う城地の改修に際して破却された建物に由来する可能性があります。

長大な東西の堀を埋め立てる一方で新たに造られた貯水池、または堀の一部と推測され、遺構の内側は砂や泥が堆積したのち、元和三年の公儀修築時に埋め立てられていました。

また、石積みのすぐ西側で木樋が出土しました。径約30cmの丸太を縦に割り、中を割り抜いてから元通りに合わせた、いわば木製のパイプです。

遺構全体の規模や木樋との関係は、今後の調査で明らかにしていきます。



北東側からみた石積み護岸を伴う遺構と木樋の検出状況